

女子大生の就業及び生活意識に関する基礎的調査 —地元定着に向けて—

吉村英俊

1. 背景及び目的

北九州市では、「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を策定し、女性と若者の定着に向け、さまざまな取り組みを実施している。また北九州市立大学においても、域内学生の当該地域就職率を向上させることを目標として掲げ、「地（知）の拠点大学による地方創生推進事業（COCプラス）」¹⁾を活用して、産学官が連携した地元企業でのインターンシップや合同企業ガイダンス、就職相談や地域・地元企業の魅力を紹介するスペースの小倉都心部への開設、学生の事業化や起業マインドを醸成するレクチャーやセミナー、市域志向科目の単位互換による域内学生のシビックプライド醸成などの事業を展開している [吉村・林 2017]。

この女性と若者の定着を図るべく、昨年度、「文系女子大生」にターゲットをあて、就業意識を調査した [吉村・林 2017]。その結果、地元就職を希望する学生には、次のような特徴があることが分かった。

- ・親と同居している。
- ・地域に愛着がある、家族と一緒に暮らしたい、今の生活を変えたくないといった今の生活を是認した考えを持っている。
- ・細く長く働きたい。リーダーとなってチームを率いるのではなく、リーダーを補佐したい。そのために、他人にはできない特殊な技術やスキルを持ちたい。
- ・楽しく働きたい、また仕事と家庭を両立させたい。
- ・会社には、働きがいと安定の両方を求めている。
- ・総務や経理・人事といった事務職を希望している。
- ・海外勤務には消極的である。

以上、ゆるキャリア志向であることがうかがえる。一方、自分が優秀だと考えている学生、親元を離れて一人暮らしをしている学生は、地元希望の学生に比べて、バリキャリアであり、仕事への意識が高く、首都圏や関西圏、ひいては海外で働きたいと考えている。またリーダーとしてチームを率いたり、転職をつうじてキャリアアップを図りたいと考えている。

以上の特徴は、先行研究²⁾をみる限り、北九州市においてのみ見られるものではなく、全国的な傾向といっている。

このような結果から、一つの懸念を抱く。それは、企業は国内の同業他社はもとより海外の企業とも競走しなければならない中で、新しいアイデアを考案し事業化したり、事業を見直し効率化したりするバイタリティに溢れた人材を求めている。果たして企業は、学生が考えているような人材を必要としているのか。企業が求めているのはバリキャリア志向の学生であり、学生自身が意識を変えないと、今後優秀な留学生に職を取られ、就職できなくなる

のではなからうか。不景気になったとき、真っ先に求人がなくなるのは、こういった定型業務ではなからうか。

このような懸念を持つ中、今年度あらためて女子大生を対象に、就業意識とその基盤となる生活意識を調査することにした。調査のポイントは、「就職意向」「働き方」「家庭生活」の3点である。

2. 調査の方法と回答者の属性

(1) 北九州市内の大学に通学する女子学生

北九州市立大学（外国学部、経済学部、文学部、法学部）、九州共立大学（スポーツ学部）、九州国際大学（現代ビジネス学部、法学部）、九州女子大学（人間科学部、家政学部）の1・2年生に対して、2017年6月～11月の間、アンケート調査を実施した。

回答者の属性は以下のとおりである。2年生が約7割、福岡県出身者が約6割、九州・沖縄・山口出身者が9割強、自宅生がやや多いものの一人暮らしの学生との割合はほぼ同じである。

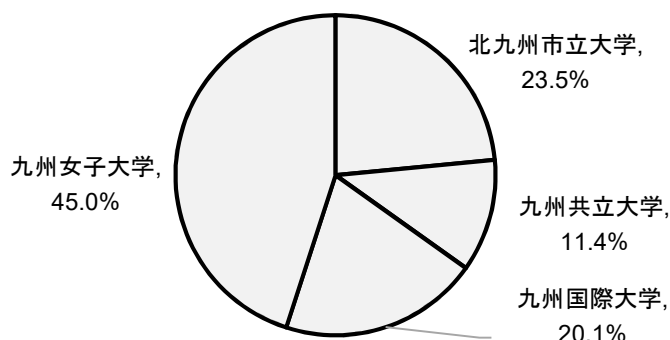


図 1. 大学別 (N=571)

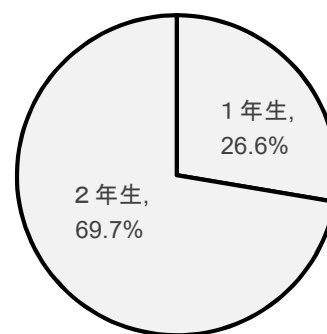


図 2. 学年別 (N=571)

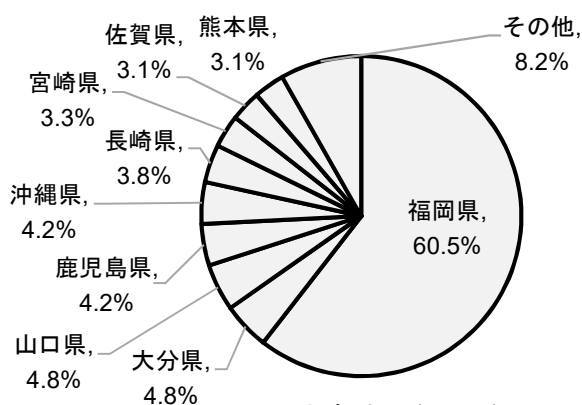


図 3. 出身地別 (N=547)

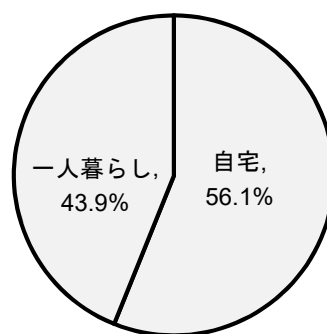


図 4. 居住形態別 (N=558)

(2) 東京都に居住する女子学生

東京都に住む1・2年生を対象に、2018年1月16日～19日の間、インターネットを用いてアンケート調査を実施した。

回答者の属性は以下のとおりである。1年生(55%)が2年生よりもやや多く、自宅生が7割を占める。またあくまで回答者の主観ではあるが、自身の偏差値を評価してもらったところ、60以上が3割、50以上60未満が5割、50未満が2割となっている。

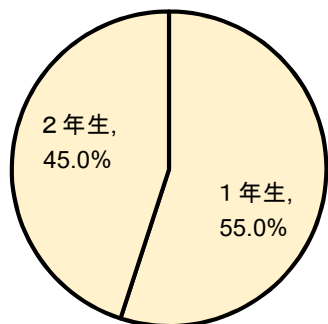


図 5. 学年別 (N=171)

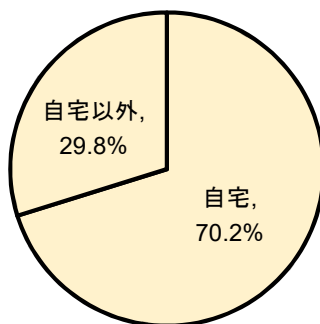


図 6. 居住形態別 (N=171)

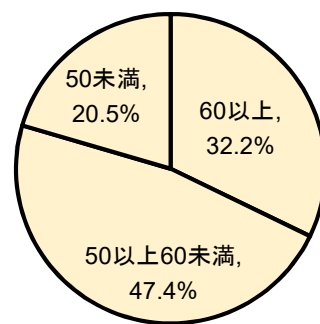


図 7. 偏差値別 (N=171)

2. 調査結果

(1) 就職したい地域

① 北九州市内の大学に通学する女子大生

1・2年生の段階で、7割強の学生が就職したい地域を想定している。このうち、15%が東京・大阪といった大都市を希望しており、8割弱が出身地もしくは北九州市・福岡市を希望している。福岡県出身者が約6割、九州・沖縄・山口出身者が9割強いることを鑑みれば、比較的多くの学生が地元を志向しているといえる。ちなみに一人暮らしの学生のうち、北九州市で就職したい学生は5%に止まっている。

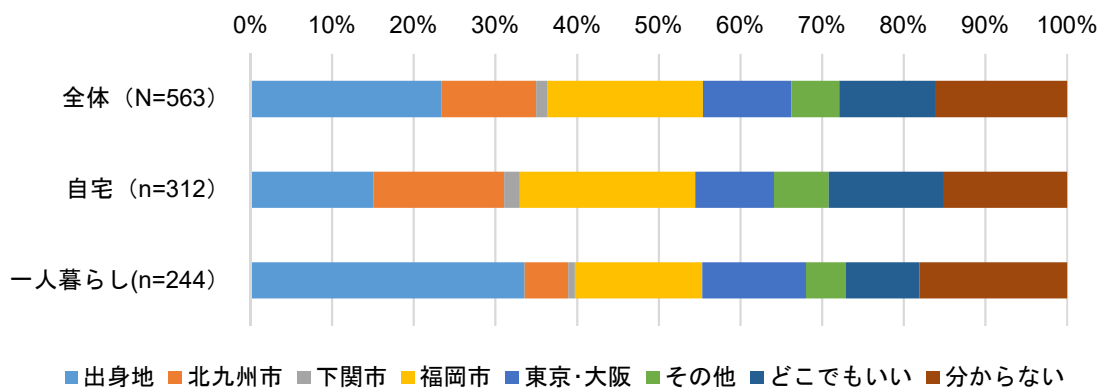


図 8. 就職したい地域 (北九州市内の大学に通学する女子学生 (以下、北九州))

②東京都に住む女子大生

自宅生は、「どこでもよい」「分からない」を除くと、ほぼ全員がそのまま東京都内で就職したいと考えている。一方、自宅以外に住んでいる女子大生は、約半数がそのまま残り、東京都もしくはその周辺地域に就職したいと考えている。出身地もしくは出身地のある都道府県の大きな都市に戻って就職したい学生は1/4に満たない。なお、偏差値による差異は見られなかった。

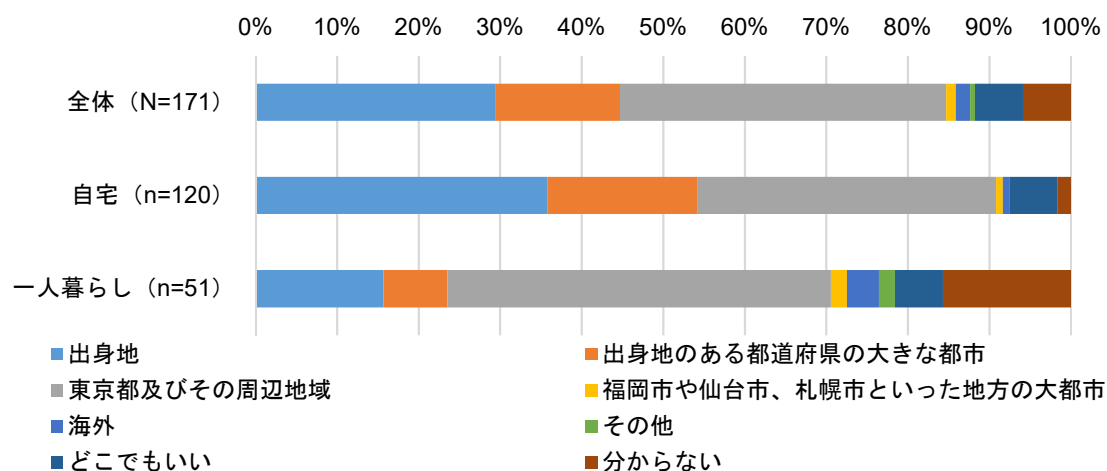


図9. 就職したい地域（東京都に住む女子学生（以下、東京））

(2) 働くとき、何が大切か

北九州市内の大学に通学する女子大生（以下、北九州）は、「人間関係」、「仕事の内容」、「職場の雰囲気」、「収入」、「会社が安定している」と続き、安心して働くことができることを望んでいることが分かる。一方、「仕事をつうじて成長できる」は約3%と少なく、「地域とのかかわりが強い」にいたってはゼロである。居住形態（自宅・自宅以外）による差異はない。

この結果を東京都に住む女子大生（以下、東京）と比較してみると、東京は「仕事の内容」や「収入」を重視している一方、「人間関係」は北九州市の女子大生ほど重視していないことが分かる。北九州同様に居住形態及び偏差値による差異は見られない。

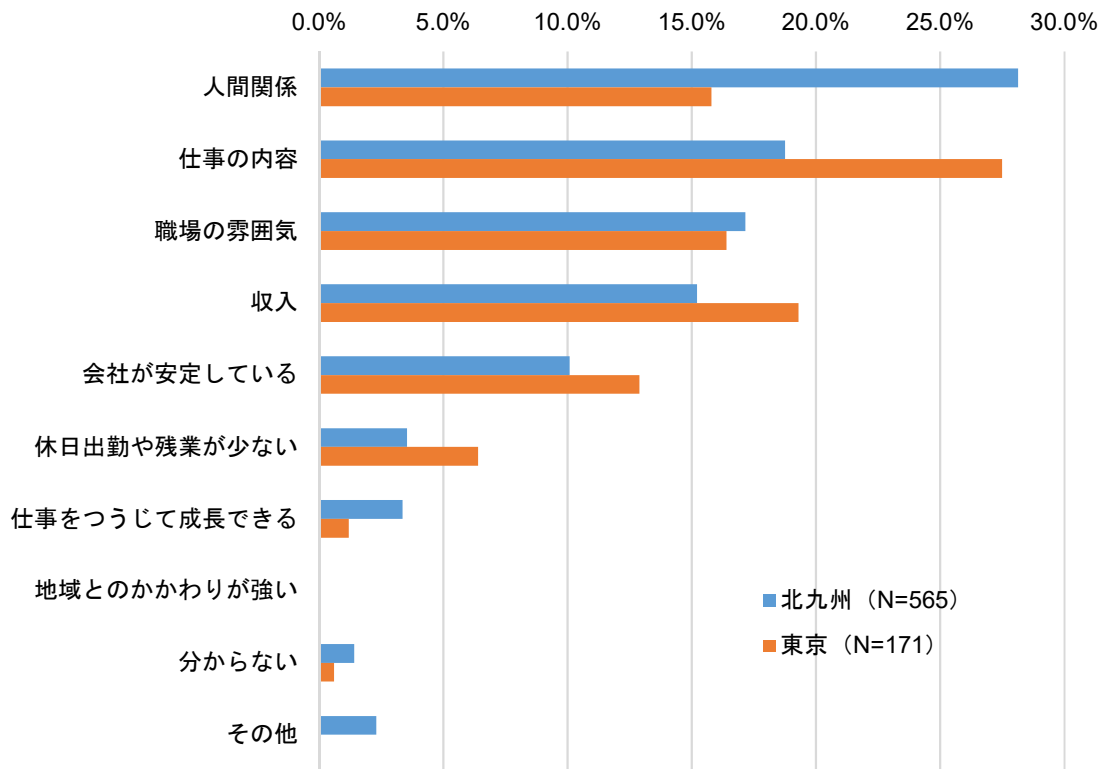


図 10. 働くとき、何が大切か

(3) 給料やボーナスはいくら欲しいか

2/3の学生が「世間並みでよい」と思っている。「仕事が多少きつなくても多い方がよい」と思う学生は1/3であり、これが多いのか少ないのかは明らかではないが、安定を志向する学生が多い中、意外と多いのではないかというのが素直な感想である。ちなみに北九州と東京の学生は、その傾向においてほとんど変わらない。

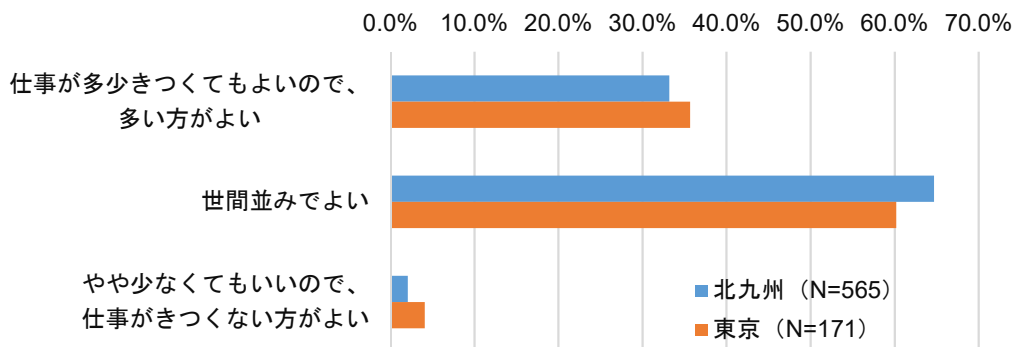


図 11. 給料やボーナスはいくら欲しいか

東京について、居住形態別にみると、やや自宅以外に住んでいる学生の方が給料やボーナスが多い方がよいと考えていることが分かる。自宅以外に住んでいる学生の場合、家賃など生活費が相当にかかることが影響しているのではかと思われる。なお、偏差値による顕著な傾向は見られなかった。また北九州においては、居住形態により差異はなかった。

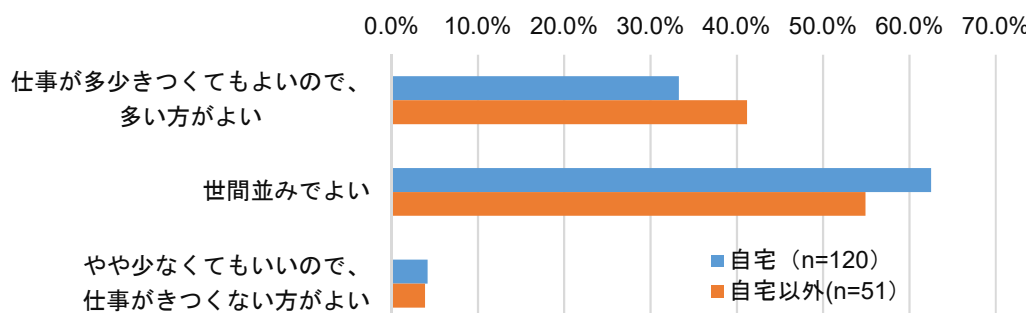


図 12. 給料やボーナスはいくら欲しいか (東京・居住形態別)

(4) 仕事が終わった後、習い事がしたいか

「どちらでもよい」、「いいえ」がそれぞれ4割弱で多く、「はい」は1/4と少ない。これは1・2年生では想像しづらかったからではないかと思われる。ちなみに東京と比較してみると、やや習い事がしたい学生が東京の方が多い。

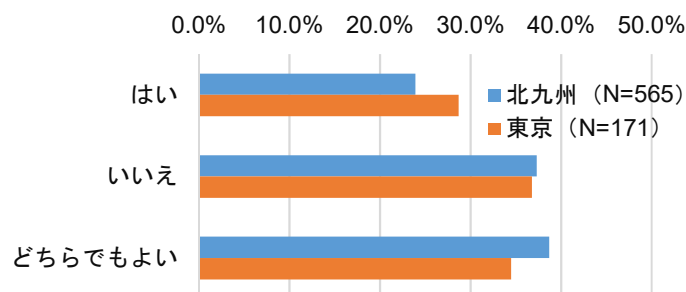


図 13. 仕事が終わった後、習い事がしたいか

ちなみに「はい」と回答した学生のうち、もっとも多かったのは「スポーツジム」であり、九州共立大学のスポーツ学部の学生だけでなく、すべての大学で第一位となっている。

東京と比較してみると、東京においては、「料理」や「楽器」「お茶・華道」が北九州に比べて多く、抽象的な言い方ではあるが、優雅な感じが受け取れる。

なお図を表記していないが、両地域とも自宅生は自宅以外に住む学生に比べてスポーツジムの嗜好し、自宅以外に住む学生は自宅生に比べて料理を嗜好する学生が多い。自宅以外に住む学生にとって、料理は必然である一方、自宅生は両親とくに母親がサポートし余裕があることがうかがえる。

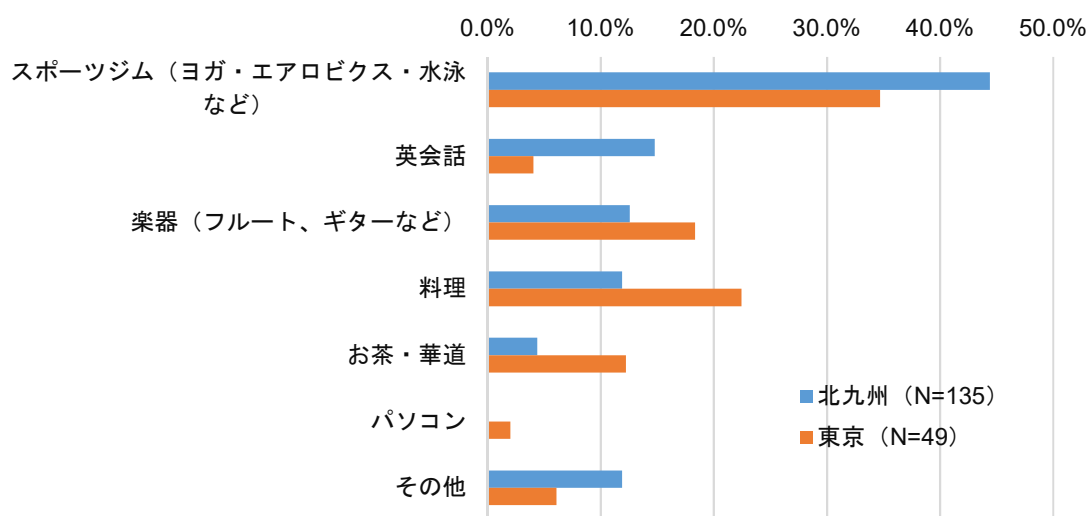


図 14. どのような習い事がしたいか

(5) 就職した後、働きながら資格を取得するならば、何がよいか

北九州においては全員に、東京においては働きながら資格を取得したいと思っている学生についてのみに問うているため、一概に比較できないが、一応「英会話」が他を圧倒していることが分かる。面白いのは、前項の習い事では「パソコン」は少なかったが、いざ資格となると第2位にランクされており、現実を見据えているといえる。なお前項同様に、想像しづらかったのか、約2割の学生が「分からない」と回答している。

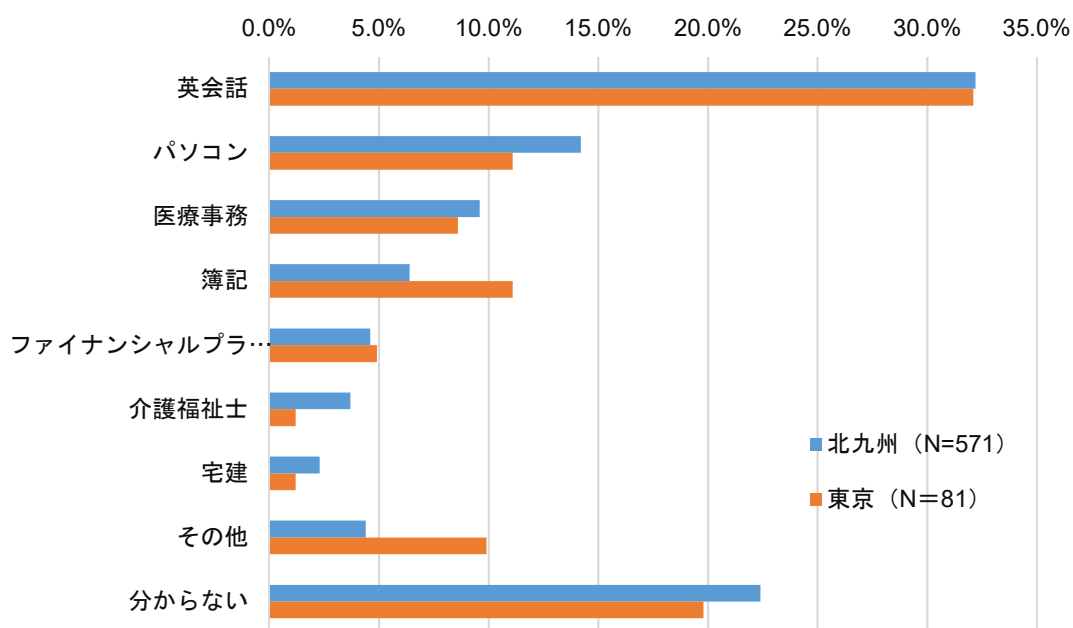


図 15. 就職した後、どのような資格を取得したいか

(6) 仕事が終わった後、友人とショッピングや食事などをしたいか

多くの学生が、仕事が終わった後、友人とショッピングが食事などをしたいと考えている。その頻度は、やや東京の方が多く、概ね月に2~3回といったところであり、一人暮らしの学生の方がやや頻度が多い。

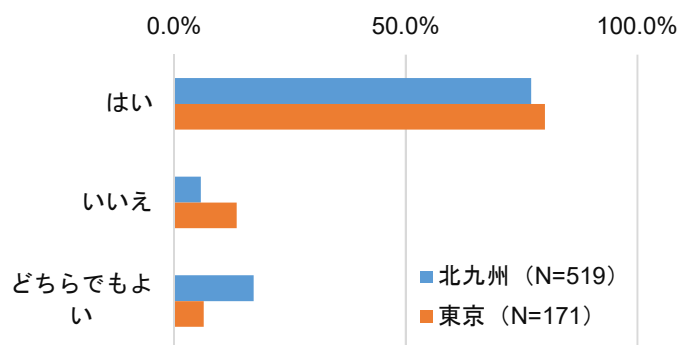


図 16. 就業後、ショッピング等がしたいか

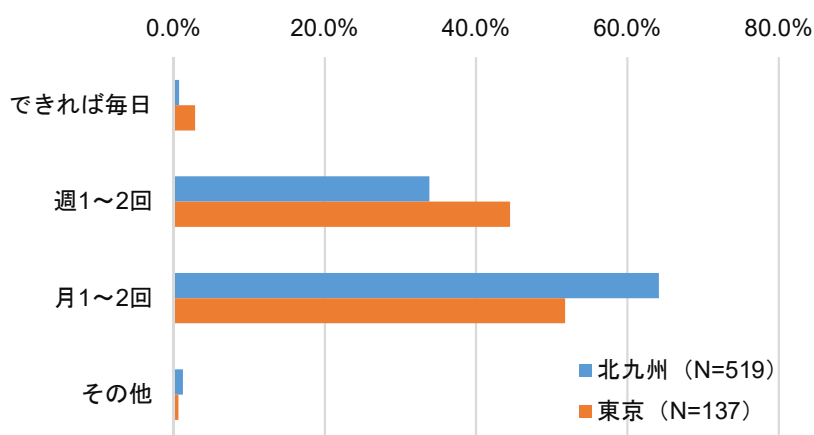


図 17. どのくらいの頻度でしたいか

(7) 仕事が終わった後、友人と会う約束をしていたが、急に残業を頼まれた時、どうするか

北九州においては7割、東京においては6割の学生が「友人との約束を断って残業をする」としている。とくに北九州においては「残業を代わってもらえる人を探す」学生(15%)を加えると、約85%の学生が会社の仕事(残業)を真摯に受け止めていることが分かる。ちなみに北九州においては1割強、東京においては2割弱の学生が「残業を断る」と回答している。

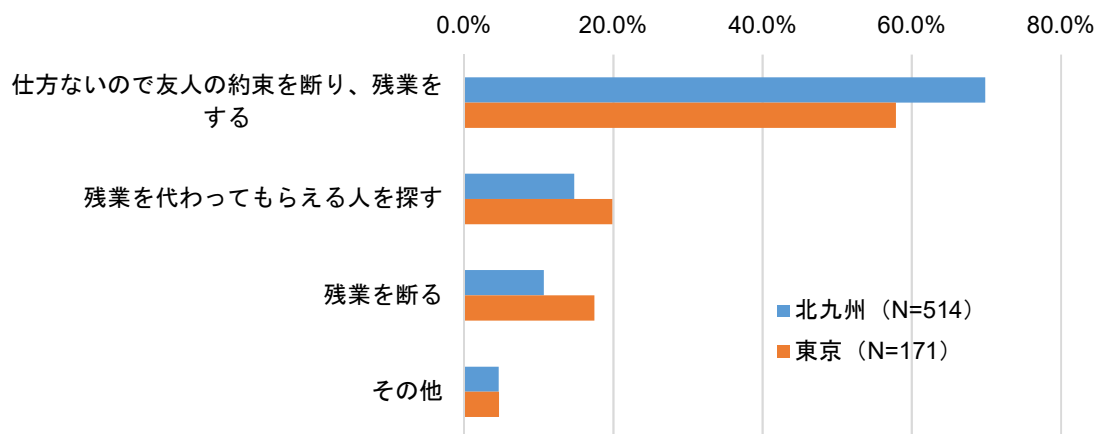


図 18. 残業を頼まれた時、どうするか(北九州、N=514)

(8) 将来、やりたいことや夢があるか

半数以上の学生が、将来、やりたいことや夢があると回答している。北九州の大学別では九州共立大学が高く(約68%)、北九州市立大学が低い(約39%)。

やりたいことや夢で最も多かったのは、北九州においては「教員」や「保育士」といった教育関係であり、次いで「警察官」が多かった。一方、「起業」や「会社経営」は少なかった。東京においては「海外」にかかわるものが多く、海外に住む、海外で働く、海外旅行をするなどである。その他、「メディア」関連の仕事をしたり、分野はともあれ「アーティスト」になりたい人も多く、北九州と違いが見られた。

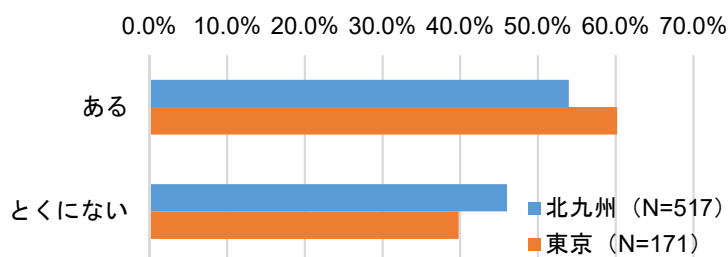


図 19. 将来のやりたいことや夢があるか

(9) 子どもができたら、仕事はどうするのか

北九州において、子どもができて「仕事を続ける」学生が30%、それに対して「辞める」学生が53%、専業主婦となる学生が4%いる。子どもができたら「一旦辞めて子育てに慣れてきたら正社員で働きたい」学生がもっとも多い(35%)。ちなみに「仕事を続ける」学生が最も多かったのは北九州市立大学の約39%、逆に少なかったのは九州女子大学の24%である。

一方、東京においては北九州に比べて「専業主婦になる」が多く、また「一旦辞めて子育てに慣れてきたらパートで働く」もやや多いなど、仕事に対して消極的な態度がうかがえる。これはとくに自宅生において顕著である。なおこの自宅生の方が仕事に対して消極的な態度は、北九州においても東京ほど顕著ではないがうかがえる(図の表記なし)。

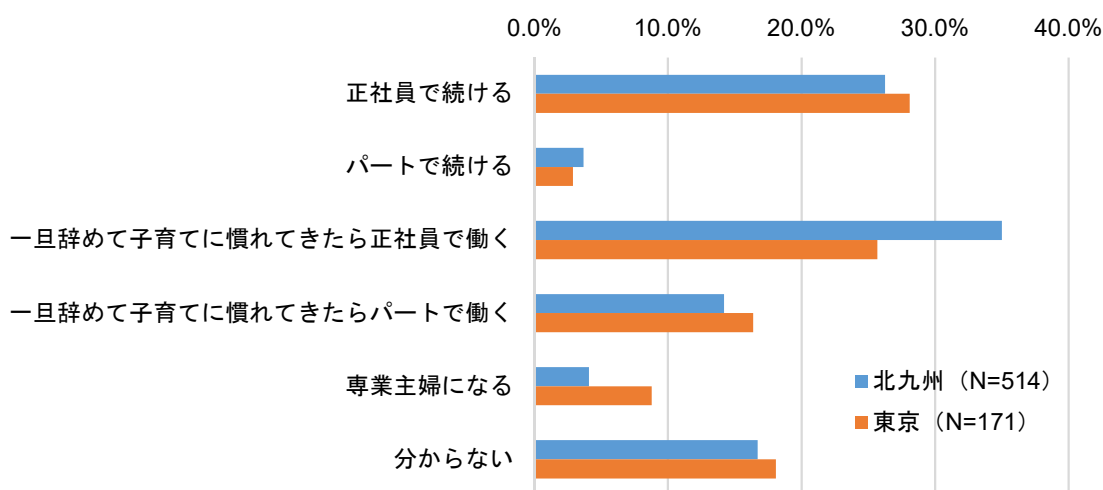


図 20. 子どもができたら、仕事はどうするか

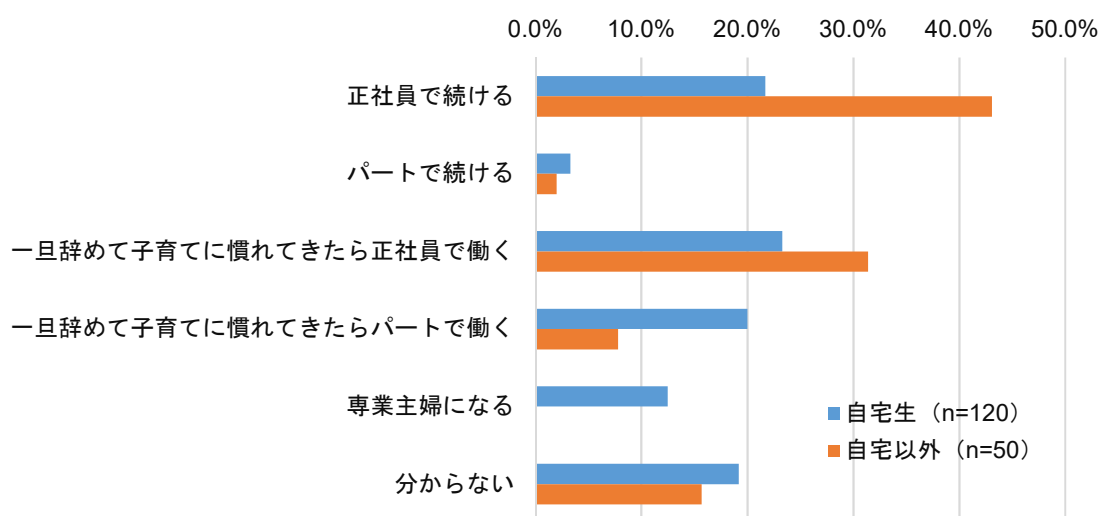


図 21. 子どもができたら、仕事はどうするか (東京: 居住形態別)

(10)子どもができたら、親にみてもらいたい

北九州において「そのときの状況次第」が最も多く（56%）、肯定も否定もしていない。「親にみてもらいたい」は約30%と比較的多く、親にみてもらうことを完全に否定している学生は5%と少ない。なお居住形態による差異はない。

設問の選択肢が異なるため、直接比較することはできないが、東京においても北九州と同様の結果を得ている。なお自宅生の方が親にみてもらいたいと思っている。

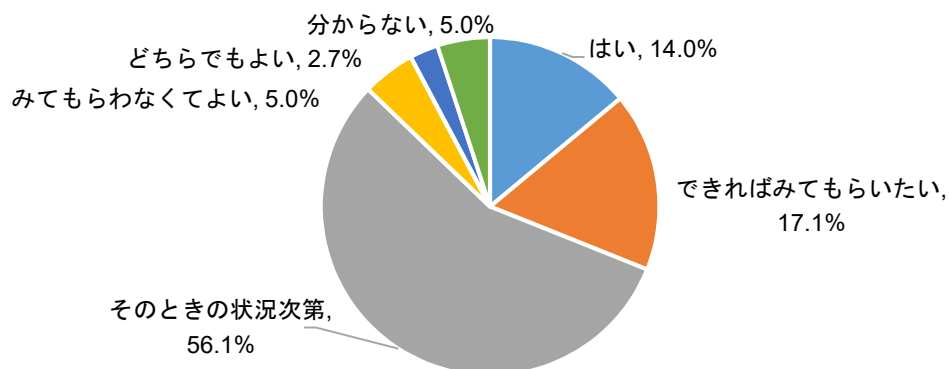


図 22. 子どもを親にみてもらいたい(北九州、N=515)

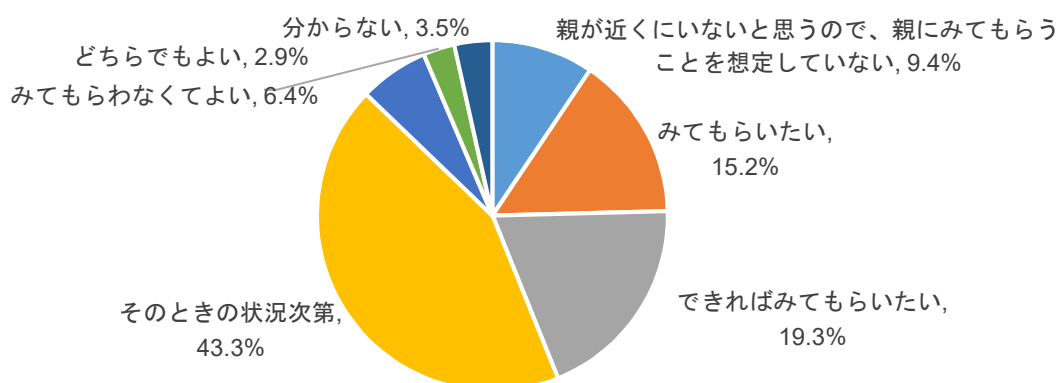


図 23. 子どもを親にみてもらいたい(東京、N=171)

(11)結婚したら、親と同居してもよいか

北九州において、「そのときの状況次第」が最も多いものの（約 32%）、程度の差はあれ同居に肯定的な学生が約 25%、逆に同居に否定的な学生は約 37%いる。どちらかといえば、現在、親と同居している自宅生の方が、明確な意思を持っている（そのときの状況次第：約 26%）。なお居住形態による差異はない。

前問同様、設問の選択肢が異なるため、直接比較することはできないが、東京においても北九州と同様の結果を得ている。

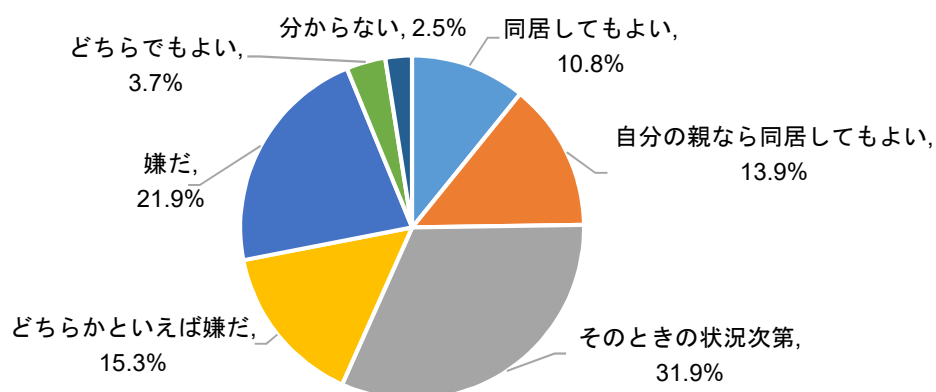


図 24. 親と同居してもよいか(北九州、N=517)

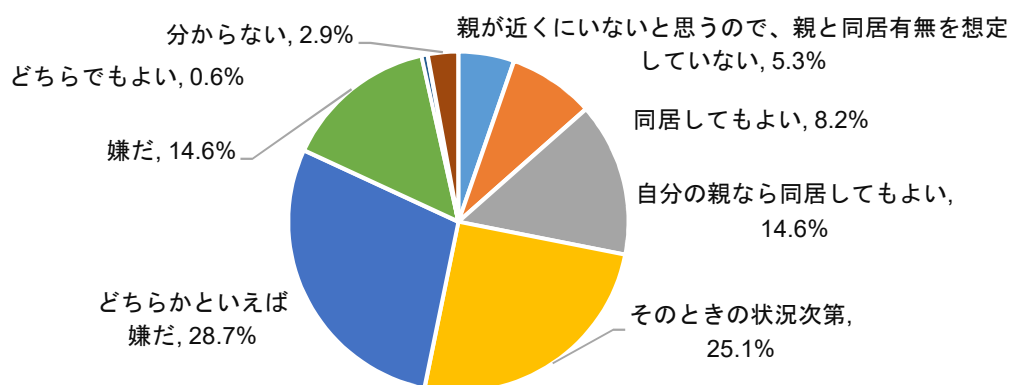


図 25. 親と同居してもよいか(東京、N=171)

(12) 配偶者から専業主婦になってほしい（子育てに専念）といわれたらどうするか

北九州において「専業主婦になる」「そのときの状況次第だが、できればそうしたい」学生（約 43%）と「仕事を続ける」「そのときの状況次第だが、できれば仕事を続けたい」学生（約 45%）の割合はほぼ同じである。

東京においてもほぼ同様の傾向を得ているが、やや東京の方が「専業主婦になりたい」意向が強い。

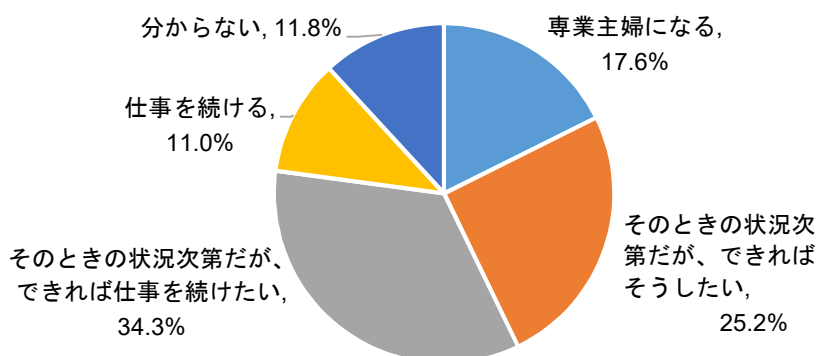


図 26. 配偶者から専業主婦になってほしいといわれたらどうするか(北九州、N=516)

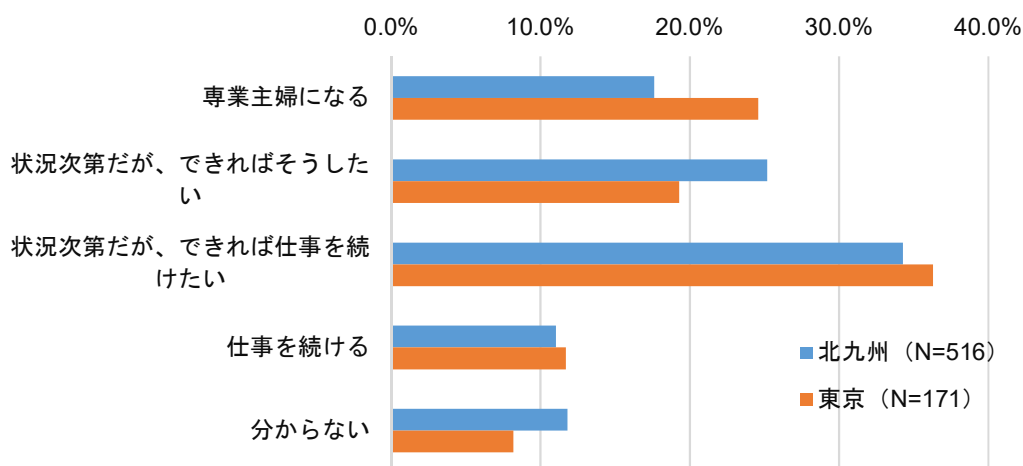


図 27. 配偶者から専業主婦になってほしいといわれたらどうするか

(13) 配偶者に何を望むか

北九州において「安定した仕事（収入）」、「家事と仕事の両立」が多く、一方、「出世」や「夢を持っている」は少ない。安定を望んでいることが分かる。

東京においても、「家事と仕事の両立」が北九州にくらべてやや少ないものの、ほぼ同様の結果を得ている。

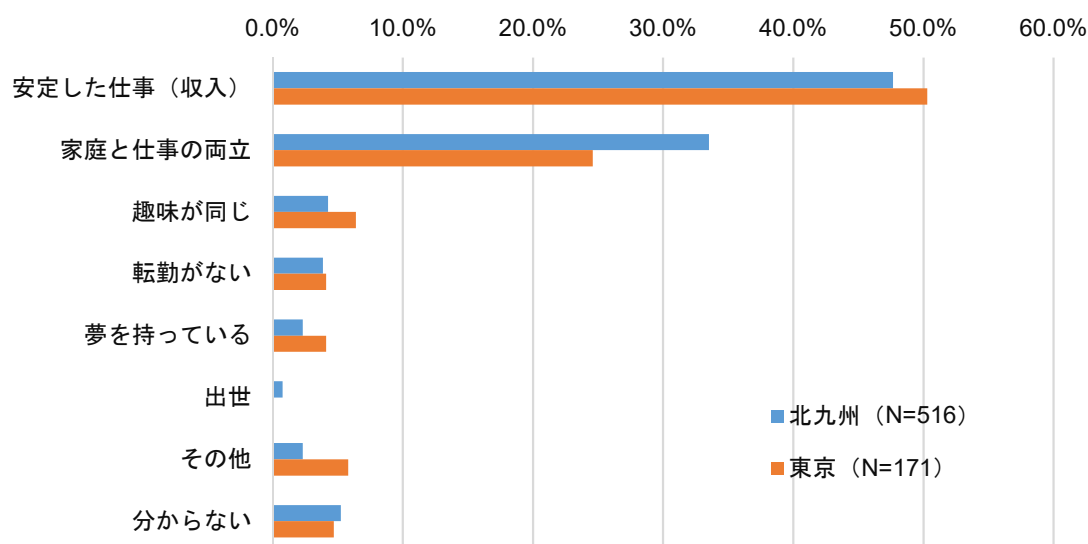


図 28. 配偶者に何を望むか(北九州、N=516)

4. まとめ

アンケート調査の結果から、就業や働き方、家庭生活に対して、次のような女子大生の姿が見えてくる。なお北九州市に住む学生と東京都に住む学生の間には顕著な差異はなく、自宅生と自宅以外に住む学生との間にはやや相違が見られた。

- ・自宅生は現在住んでいる地域もしくはその周辺地域に就職したい。一方、自宅以外に住んでいる学生は、東京都に住んでいる学生はその多くがそのまま東京都に残るのに対して、北九州市に住んでいる学生は多くが外に出てしまう。
- ・職場環境のよい安定した会社で興味のある仕事をし、世間並みの給料をもらえればよい。仕事をつうじて成長するとか、地域とかかわりを持つとかいったことには関心がない。
- ・残業を頼まれれば、用事があっても残業をする。
- ・仕事が終われば、月に2～3回程度、友人とショッピングや食事がしたい。また習い事をしてほしいと思っている。資格を取るならば、英会話がよい。
- ・将来やりたいことがあるといえばある。(北九州市に住む学生：教員・保育士・警察官など、東京都に住む学生：海外志向・アーティスト)

- ・子どもができたならば仕事は一旦辞める。子育てに慣れてきたら、できれば正社員で働きたい。(子どもができて仕事も続けたいは3割程度。自宅生の方が辞める傾向が強い)
- ・子どもができたとき、親にみてもらうかどうかは、そのときの状況次第。
- ・結婚してから、親と同居するかどうかは、そのときの状況次第ではあるが、どちらかといえば嫌だ。
- ・子どもができて、配偶者から専業主婦になってほしいといわれたら、そのときの状況次第で考えたい。
- ・配偶者には、安定した仕事(収入)と家庭との両立を期待する。出世はしなくてよい。夢を持っている必要もない。

以上から、とくに顕著なまた特徴的な意向をうかがうことはできない。一言でいえば、「普通」の若い女性ということができる。

地元定着の方策のポイントは、北九州市においては、「地元就職を希望している自宅生をしっかりと確保する」、そして「自宅以外に住む学生を逃がさないようにする」である。

昨今、さまざまな書籍³⁾において都市比較が行われているが、その視点の多くは「住み易い」である。そういった意味において、北九州市は国内の数ある都市の中でも非常に優れており、高い評価を得ている⁴⁾。しかし、人口減少が止まず、本調査においても自宅以外に住む多くの学生は北九州市に止まろうとしていない。北九州市は住み易いかもしれないが、「住みたくなる」街ではないのである。街の魅力とは何なのか、住み易い街の評価結果に甘んずることなく、マーケティングの視点から再考し、的確な方策を講じる必要がある。

最後に、多くの地方都市では、地元定着やU・Iターンを推進して人口増を図ろうとしている。やや視点を変えてみたとき、20世紀が「生産性」や「効率性」を追求したのに対して、現在は「創造性」を求めている。そうしなければ、総人口が減少し、かつ高齢化が進む中で国が埋没してしまう。創造性を生み出すのは、人の「量」ではなく「質」である。昨今の政策は、量の増加に焦点をあてているが、これからは質の向上にも注力する必要があるのではないかと思う。

注

1) 北九州市と下関市に立地する13の大学・高専、3つの自治体、3つの経済団体が一丸となって「北九州・下関まなびとぴあ」を組織し、自治体の「まち・ひと・しごと創生総合戦略」を後押しし、学生の地元定着等を推進する。事業期間：2015年度～2019年度(5年間)

2) 例えば、加藤佳子、清水めぐみ「女性の就業意識」、岡崎女子短期大学、2005。島直子「女子大学生の就業意識」『NWECC実践研究第6号』、国立女性教育会館、2015。城島博宣・白河桃子・幸田達郎・城佳子「女子大生の結婚観と職業観の調査」『生活科学研究34』、文教大学、2012など

3) 例えば、『地域経済総覧』東洋経済、『都市データパック』東洋経済など

- 4) 「住みたい田舎ランキング」<https://www.nishinippon.co.jp/nnp/national/article/386018>,
「50歳から住みたい地方ランキング」 <https://seniorguide.jp/article/1008097.html> 他

参考文献

- 1) 吉村英俊、林一夫、2017、「文系女子大生の就業意識に関する調査研究—地元就職促進に向けて—」『2016年度地域課題研究』北九州市立大学地域戦略研究所、2017